

命の尊さと平和

(劇研「空」会報第5号より転載)

― 看護婦さーん、と呼ばれて ―

勝部 信子

昭和二十年四月広島陸軍病院の疎開先となった大田分院に私は学徒動員として勤務しておりました。

処が八月六日広島に原爆投下、其の三日後には被爆兵士の方々が地獄絵図そのままに大田駅へ護送され駅からはトラックや、リヤカー、担架又は戸板に乗せて大田分院に当てられていた高等女学校(現大田一中)と大田中学校(現大田高校)の四校舎に收容されましたが大田分院にたどり着く迄に息絶えた気の毒な方もありました。

ボロボロの軍服、半裸の人、全員がはだし、血まみれの人、顔面が黒く腫れた人、皮膚がズルリとむけた人、全身火傷でウミが流れてる人、そうしたドロドロの皮膚にも赤チンや新聞紙が当てがってあるだけの無残な姿、其の時の光景は今でもはっきり憶えて居ります。

直ぐ講堂に運ばれ板の間にゴザを敷いて寝かされました。時間が経過するにつれ異様な火傷の臭いはひどく毎日病院通いするのにガ―ゼを何枚重ね合わせたマスクをしても末広町あたりから鼻をついたものです。傷口には蠅が群がりウジがわき苦しまれる其の時の様子は唯々お気の毒で十四才の女学生だった私にとって、どうしたら良いのか戸惑う事が多く、今迄優しく対応して下さった衛生兵も原爆病院化してからは、まるで戦場のような中で気が立ってよく叱られる事もありました。身の毛も

よだつような風景を目の前にし乍ら、か細い声で「看護婦さーん、水、水を下さい」とせがまれると今迄の日常勤務は返上して、にわか看護婦としてのお世話が続きました。懸命な看護の甲斐もなく、かすかな声で「お母さーん」の言葉を最後に次々と息を引きとられる姿を見るのはつらいものでした。

全国各地から留守家族の方々が子に、夫に、弟に・・・と面会を求めて駆けつけ休む暇もなく看護に当る方、今しがた死亡との知らせで泣き崩れる方、様々でしたが其の中には軍医の息子(小学校一年生)の姿もありました。この子は学童疎開で一人生き残り、父親を探し尋ねて大田に来て懸命に看病しておりましたが遂に死亡、其の遺骨を小さな胸に抱いて独り広島に帰って行きました。

音楽室がにわか霊安所となり、亡くなった方が次々と運び込まれますが棺が間に合わない状態でした。霊安所から棺が出る時には線香をたいて涙でお見送りしました。

それぞれの家庭にとっても、お国にとっても、かけがえの無い大切な人を失ってしまった戦争という過ちを二度と繰り返してはならないと思います。

恐ろしい原爆を体験した者の一人として、戦争の恐ろしさを伝え、命の尊さに目覚め、明るい平和な社会を創る事こそ私たちに課せられた大きな使命である事を実感しております。

※『星空の卒業式』公演でパンフレット掲載用に、お願いして書いて

頂き、それを会報5号に載せたものです。貴重な証言記録です)

